

5.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは生態系の健全さの指標となる生態系上位種のヘビ類や、河川敷の草地環境を利用するカヤネズミなどの確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

【河川の自然度（爬虫類の確認状況）】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- **全国のほとんどの河川でシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシを確認**
地域の生態系の良好さをみるため、生態系の上位種であるシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシの確認状況を整理しました。
今回とりまとめを行った20河川のうち、シマヘビは18河川、アオダイショウは18河川、ヤマカガシは15河川、マムシは7河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみるとアオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。
(資料掲載: 5-8～5-10、5-28ページ)

確認河川数の比較

| 種類 | 前々回調査 | 前回調査 | 今回調査 | 対象河川 |
|---------|-------|------|------|------|
| シマヘビ | 18河川 | 19河川 | 18河川 | 20河川 |
| アオダイショウ | 14河川 | 14河川 | 18河川 | 20河川 |
| ヤマカガシ | 14河川 | 16河川 | 15河川 | 18河川 |
| マムシ | 7河川 | 6河川 | 7河川 | 20河川 |

生態系の上位種は、環境変化による種構成の変化、また、それに伴う餌生物の変動などの影響を最も受けやすいことから、地域の生態系の変化をみる上で重要なグループであると考えられます。

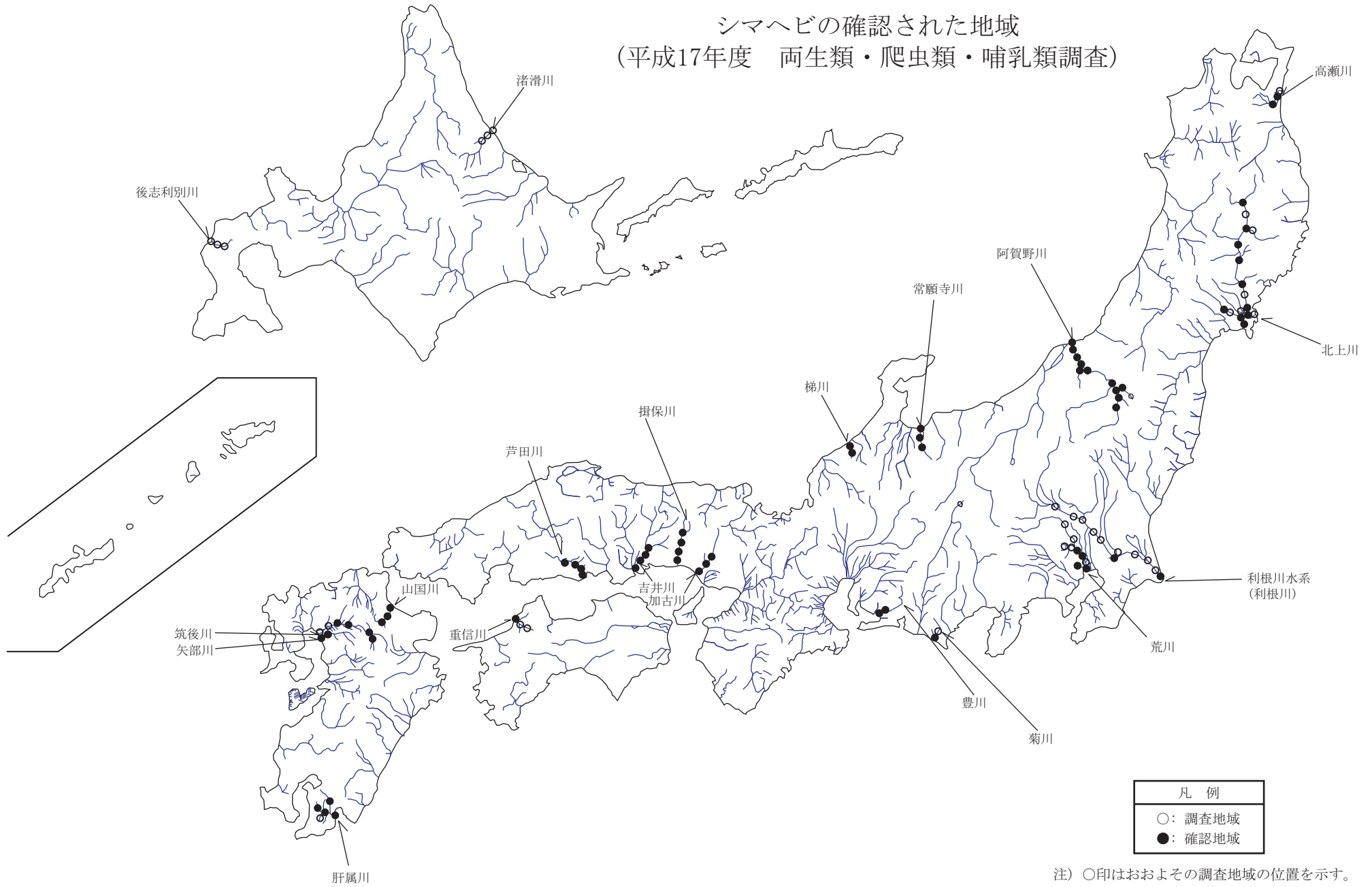
シマヘビとアオダイショウは北海道地方から九州地方南部まで分布し、ヤマカガシは北海道地方を除く本州から九州地方にかけて分布し、マムシは北海道地方から九州地方にかけて分布しています。今回調査では、シマヘビは東北地方から九州地方までの広い範囲で、アオダイショウは北海道から九州地方までの広い範囲で、ヤマカガシは四国地方を除いた東北地方以南で、マムシは東北地方から近畿地方で確認されました。

前々回から今回調査をみると、アオダイショウでは確認河川数の増加がみられました。一方、シマヘビ、ヤマカガシとマムシでは前々回から今回調査にかけて確認河川数にあまり変化はみられませんでした。

これらのことから調査対象河川においては、これら生態系上位種の生息が可能な生態系が維持されているものと推測されます。

シマヘビの確認された地域
(平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

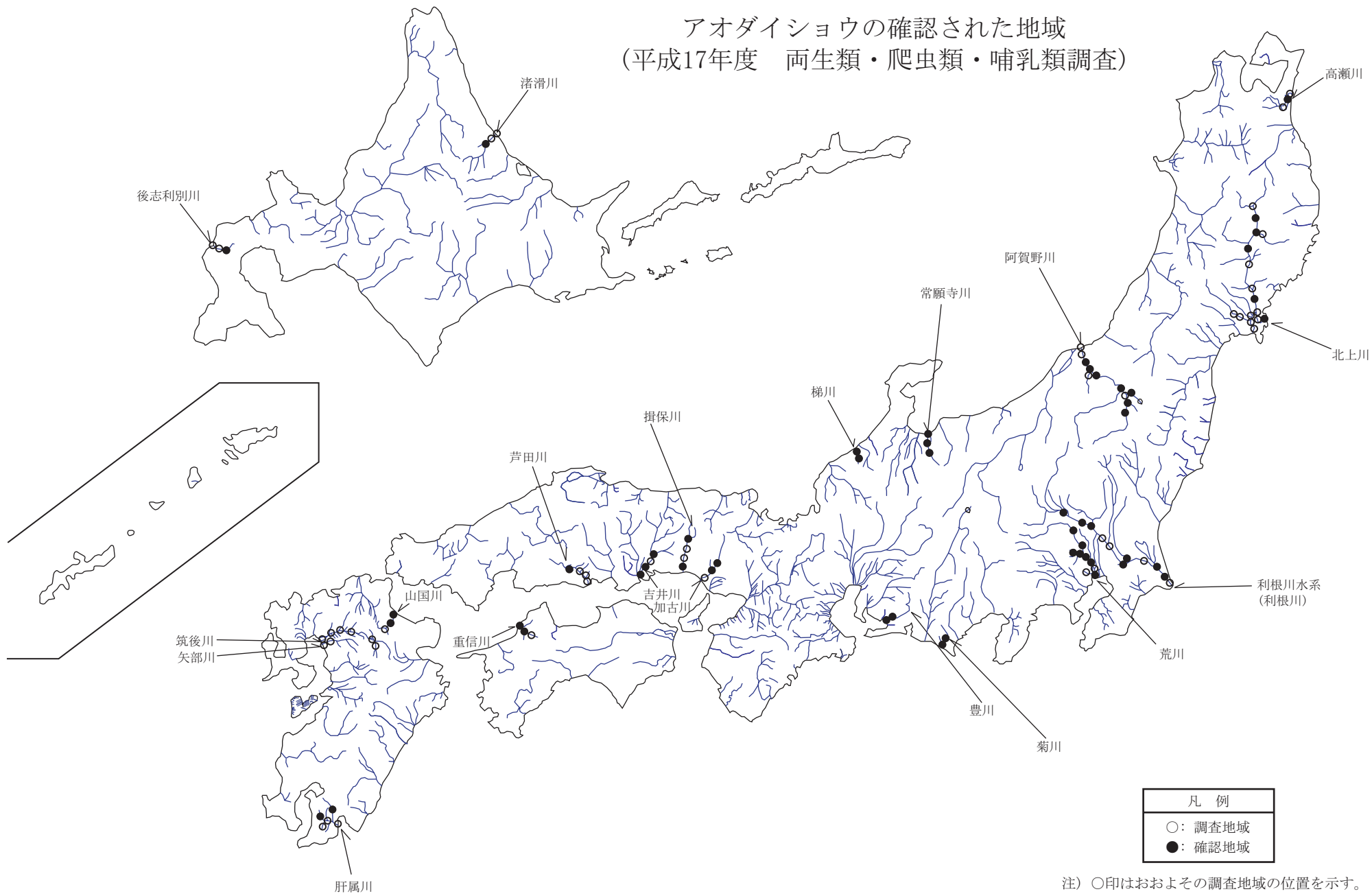
5-8



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

アオダイショウの確認された地域
(平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-9

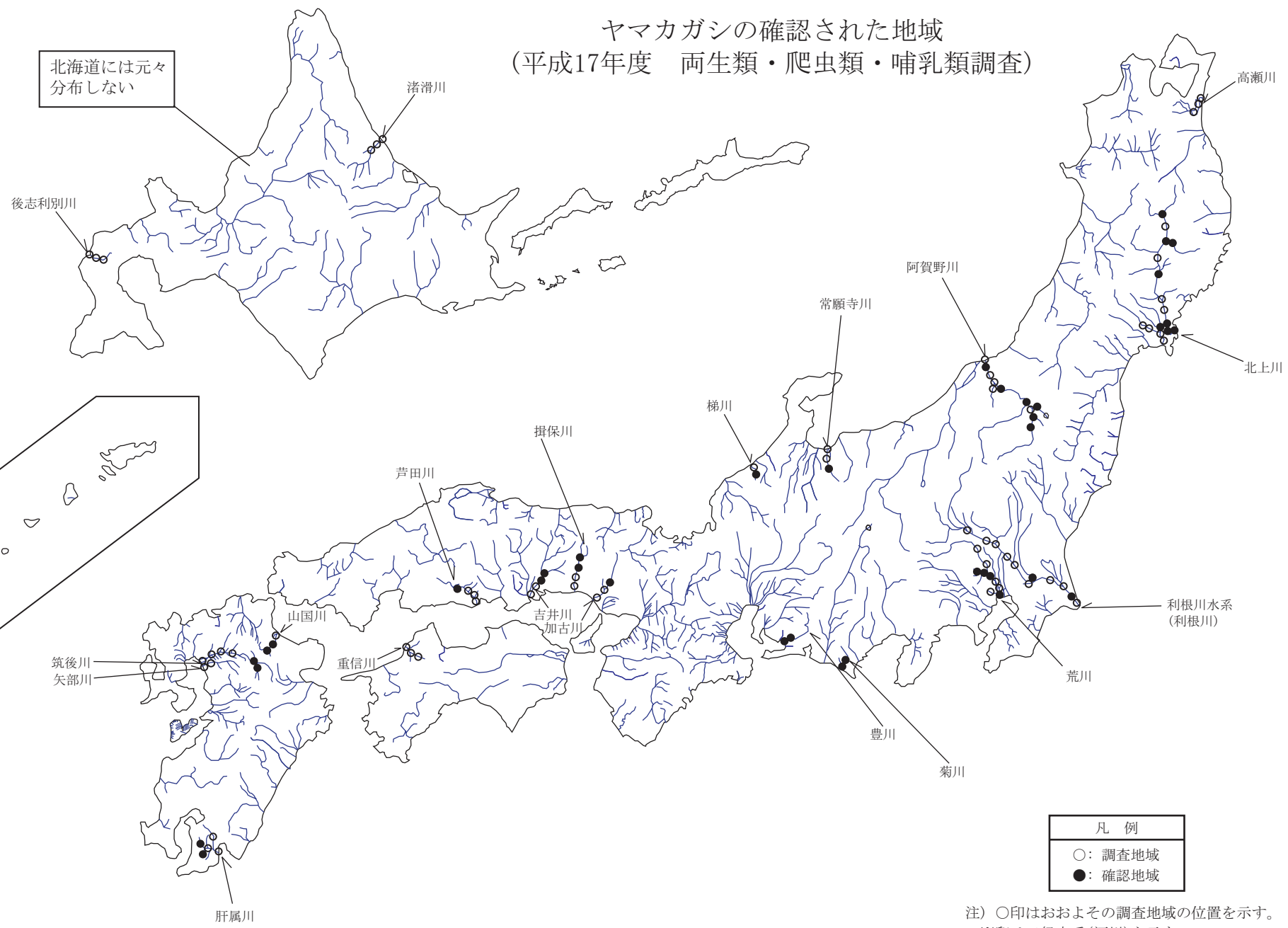


| 凡 例 | |
|-----|------|
| ○ | 調査地域 |
| ● | 確認地域 |

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

ヤマカガシの確認された地域 (平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

北海道には元々
分布しない

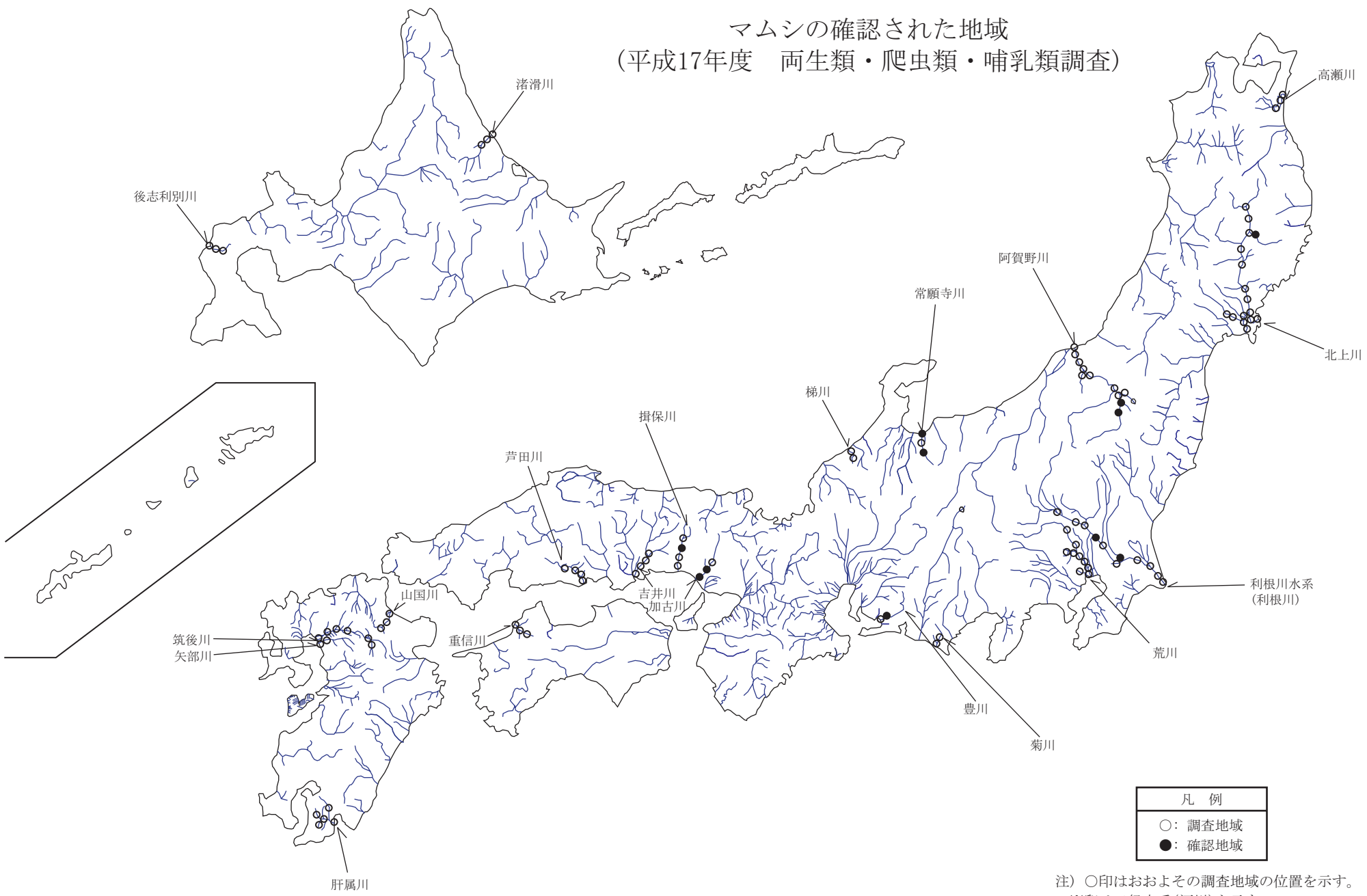


5-10

| 凡 例 | |
|-----|------|
| ○ | 調査地域 |
| ● | 確認地域 |

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

マムシの確認された地域
(平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



| 凡 例 | |
|-----|------|
| ○ | 調査地域 |
| ● | 確認地域 |

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

- **全国のほとんどの河川でイタチ科を確認**

河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられている中型哺乳類であるイタチ科（テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ）の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 20 河川のうち、イタチ科は北海道地方から九州地方の広い範囲で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、テン、イタチ、アナグマで確認河川数の増加がみられました。

（資料掲載:5-13～5-15、5-28ページ）

確認河川数の比較（対象河川: 20 河川）

| 種類 | 前々回 調査 | 前回 調査 | 今回 調査 |
|--------|-----------|----------|----------|
| テン | 11 河川 | 11 河川 | 13 河川 |
| エゾクロテン | 0 河川 | 0 河川 | 0 河川 |
| イタチ | 10 河川 | 9 河川 | 12 河川 |
| アナグマ | 2 河川 | 2 河川 | 4 河川 |
| イタチ科 | 16 河川 | 16 河川 | 19 河川 |

イタチ科：テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ

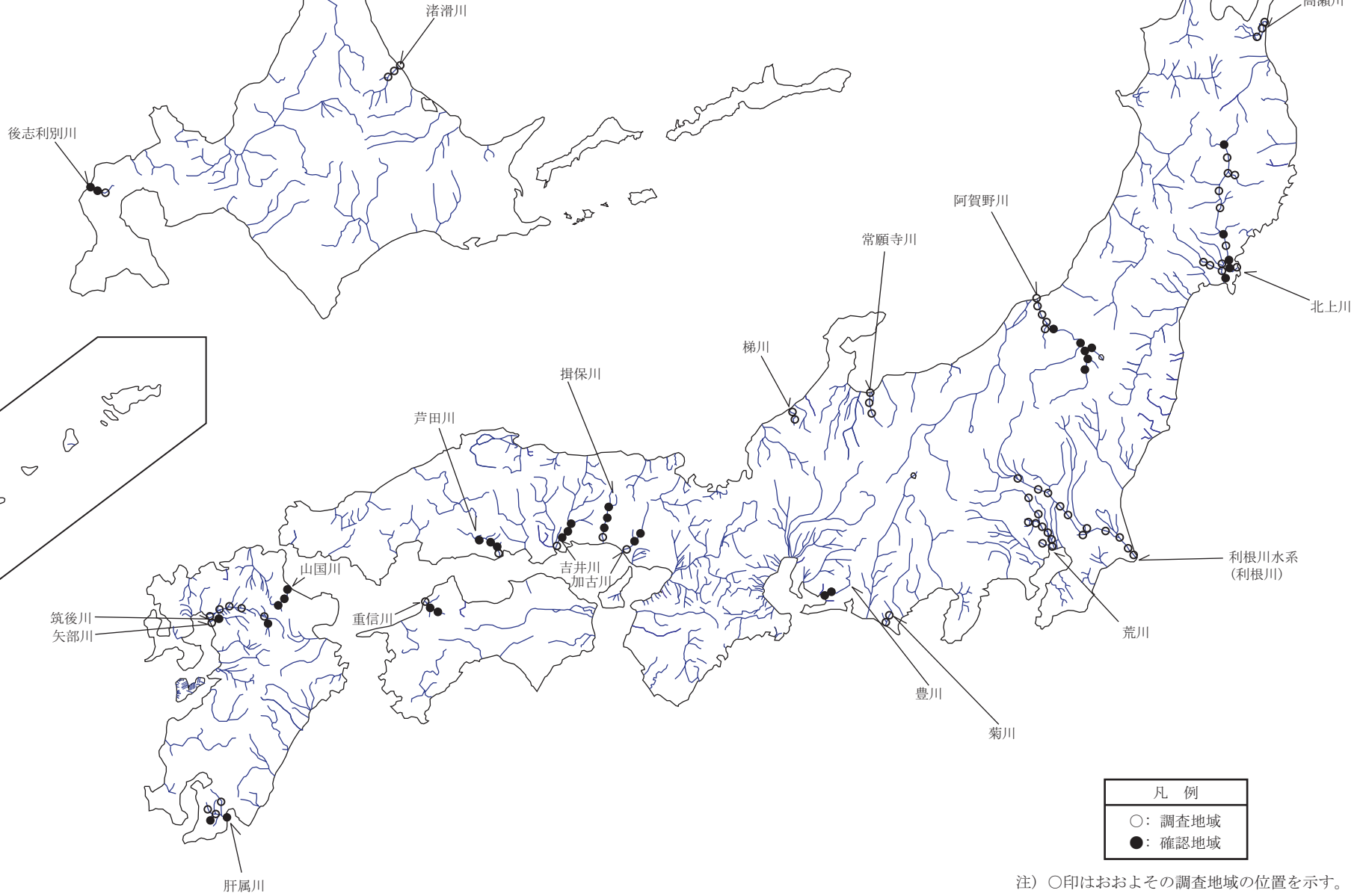
河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられている中型哺乳類であるイタチ科（テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ）の確認状況を整理しました。

イタチ科は雑食性に近い肉食性の動物で平地から山地の川や田んぼ等の水辺周辺に生息しています。

また、前々回から今回の調査結果をみると、テン、イタチ、アナグマ、イタチ科で確認河川数の増加がみられました。

このことから調査対象河川及びその周辺環境は、これら中型哺乳類が生息するのに適した環境を有しているものと推測されます。

テンの確認された地域
(平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

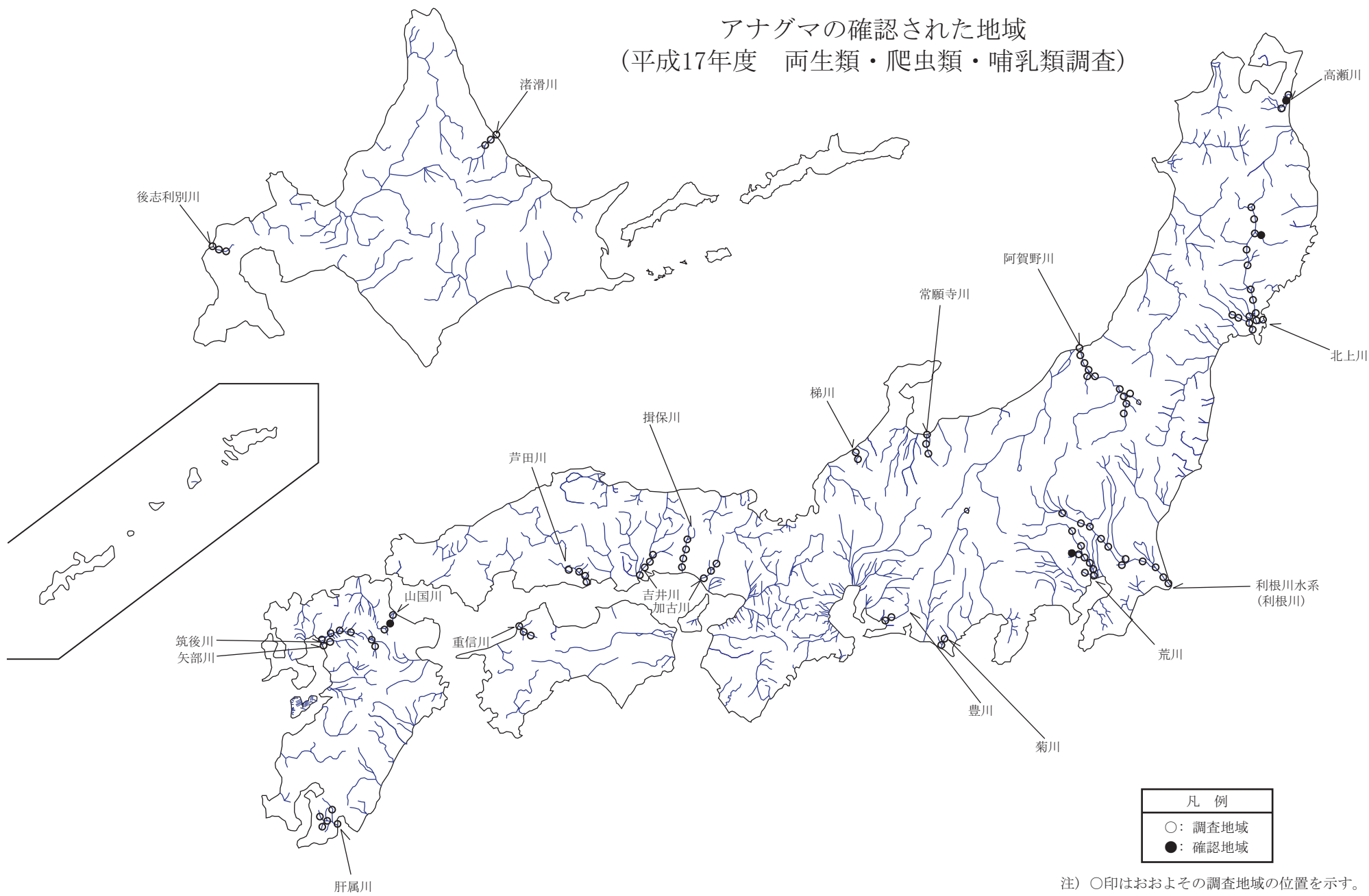


| 凡例 | |
|----|------|
| ○ | 調査地域 |
| ● | 確認地域 |

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

アナグマの確認された地域
(平成17年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

5-15



| 凡 例 | |
|-----|------|
| ○ | 調査地域 |
| ● | 確認地域 |

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
※印は二級水系(河川)を示す。

【河川敷の草地環境を利用する種の生息状況】

(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

● **カヤネズミを関東地方以南の 13 河川で確認**

高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するカヤネズミは、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。そこで、確認状況の変化から、河川及び河川周辺環境の変化の把握を行いました。

今回とりまとめを行った 20 河川のうち、関東地方以南の 13 河川で確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると確認河川数に変化はみられませんでした。

(資料掲載:5-17、5-28ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 20 河川)

| 種類 | 前々回調査 | 前回調査 | 今回調査 |
|-------|-------|-------|-------|
| カヤネズミ | 12 河川 | 13 河川 | 13 河川 |

カヤネズミは本州の太平洋側では宮城県南部以南、日本海側では石川県以南、四国、九州、隠岐、淡路島、豊島、因島、対馬、天草諸島下島に主に分布します。高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣する本種は、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。

今回の調査結果をみると、カヤネズミは関東地方以南で確認されており、従来知られている分布範囲のほとんどで確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、前々回もしくは前回調査で確認された河川のほとんどでは、今回調査でも確認されました。なお、カヤネズミは、高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するため、これらの確認状況は、調査範囲の違い等の影響を受けると考えられます。

カヤネズミは河川整備などの影響で生息域が狭められ、生息数も減少していることが知られています。従って、今後も引き続きモニタリングを続け、本種の生息状況を明らかにしていくことが必要であると考えられます。

